

「創発的協働研修」の課題と展望に関する報告

— 保育記録に関する課題の共有を手がかりとした継続的取り組み —

本岡 美保子¹⁾・山田 直之²⁾・濱名 潔³⁾

広島都市学園大学 子ども教育学部¹⁾・関西大学 文学部²⁾・認定こども園 武庫愛の園幼稚園³⁾

要 旨

本稿は筆者らが参画する「創発的協働研修」（「あいまーる」）の取り組みを紹介すると共に、自主シンポジウムの報告と「あいまーる」の課題と展望を述べることを目的としている。「創発的協働研修」とは形成的介入研究をその方法論とし、研究者と保育者が組織や立場を超えて協働することによって新たな活動形態の創発をめざす研修のことである。我々は「創発的協働研修」である「あいまーる」を2回実施し、各園の保育記録に関する取り組みを紹介し合い、個人が抱える課題を検討してきた。自主シンポジウムでは「あいまーる」によって生まれた各園の新たな葛藤を開示し、「あいまーる」において拡張的学習を実現したいという展望を描いた。これまでのところ課題の共有にとどまり、集団的主体としてのエージェンシーは現れていないと考えられる。今後は保育記録に関する矛盾や葛藤を掘り起こし、参加者共通の問題として探究し、拡張的学習を行なっていきたいと考えている。

キーワード：創発的協働研修、保育者、協働、保育記録、形成的介入研究

I. はじめに

1. 保育者の学びの場をめぐる動向

保育者の学びの場である研修は、保育者にとってますます重要なものとなっている。「保育所保育指針」（厚生労働省、2017）では、保育所内外の研修等を通じた知識や技能の習得・維持及び向上の必要性が明記された。また「保育所等キャリアアップガイドライン」（厚生労働省、2017）が策定され、保育者自身の処遇改善にも繋がる形で制度化されるに至った。さらに2020年には「保育所における自己評価ガイドライン」（厚生労働省、2020）によって、研修の重要性が示された。こうしたことから研修はこれまで以上にその仕組みや内容、質が検討される必要がある（大豆生田、2020）と考えられる。

研修には保育施設内で行われる園内研修と保育施設の外部で行われる園外研修がある。園内研修といってもその内容や方法は様々で外部講師による「伝達型研修」、参加する保育者のコミュニケーションを重視した「参加型研修」、話し合いの中で新たな視点を生み出す「創発型研修」、質的研究法を応用して視点や発想を転換する「協働型園内研修」などがある（境、2020）。とりわけ協働型園内研修（中坪・境・濱名・保木井・伊勢・サトウ・安田、2018）は園の同僚性を生かした園の組織的な成長と個々人の専門性向上が期待され

注目を集めているが、研修の成否が職場の人間関係に依存しがちであることなどの課題もあると指摘されている（鈴木・吉田，2019）。

一方の園外研修には前述した「保育所等キャリアアップガイドライン」（厚生労働省，2017）に基づくキャリアアップ研修などの行政主導型の研修のほかにも、同市内の保育者による自主研修（伊藤・長江・沼野・堀尾，2016）、公開保育（片山，2013）などがある。近年では行政がコーディネーターとなって地域の学校や保育所、幼稚園の職員や、大学教員等によるワーキンググループを編成して組織的計画的に行う「循環型研修」（齋藤・金・岩崎，2020）もある。「循環型研修」は行政主導による保育者の学びの保障であるとともに、園内に限らず地域の保育実践に還元することにつながる研修でもある。しかし園外での学びを園内に伝達する難しさが指摘され、保育者主体の研修へとステップアップすることへの課題も投げかけられている（齋藤・金・岩崎，2020）。

また「循環型研修」と同様に、園外研修での学びを園内で実施し、園外研修と園内研修を往還する形で学びが展開される研修を「往還型研修」としてキャリアアップ研修の形態として取り入れている自治体もある。「往還型研修」とは講師はいるものの、一方向性の教授－学習型ではない双方向の共同学習型の学びが継続して行われ、保育者自らが課題やテーマを設定するという当事者性に基づくものである（大豆生田，2020）。

研修に関するこれらの研究からは研修の形態は違っても、保育者の課題意識や主体性を重視していることが示されていると言えるだろう。そして研究者には、研修の講師やコーディネーターなど主導者や調整者としての役割が求められてきたことが窺える。そこには保育者の学びを研究者が導くもしくは支えるという構図が描かれている。しかし、保育者の主体性をより重視し保育者を学びの担い手として位置づけるならば、研究者も保育者と共に学ぶ学習者になることができるのではないだろうか。すなわち、研究者が導いたり支えたりするのではない、課題意識を共有する研究者と保育者による相互主体的で協働的な学びの場としての研修を創造することができれば、保育者の主体性をより発揮できるのではないかと考えるのである。

このような関心から筆者らは、法人の異なる保育施設の保育者と研究者の相互主体的で協働的な学びの場としての研修（以下、「創発的協働研修」と表記）を行なっている。「創発的協働研修」は、形成的介入研究（formative intervention）¹をその方法論とし、組織や立場を超えて協働することによって、新たな概念や活動形態の創発をめざしている。

これまでも法人の異なる保育施設による研修会は行われ、他園の実践を保育者間で対話することで自園の問題解決が模索されてきた（五十嵐・齊藤・宮路・岩崎，2021）。しか

¹ 形成的介入は、当事者が問題に直面し、新しい概念を構築することで対象を分析し拡張するという方法論であるが、その内容は前もって研究者に知られていない（Engeström，2020）。「介入」についてEngeström（2016，p.65）は、Midgleyを参照し、「変化を起こすために人間が意図的に行う行動」（Midgley，2000，p.113）と定義している。どのような創発が行われるかを前もって知ることができないにも関わらず、創発それ自体は意図的につくり出されるのである。形成的介入の詳細は、Engeström（2020）を参照。

しこうした研修では、自園で認識されている問題を解決するために、言わばお手本として他園の取り組みが位置づいている可能性がある。

一方で、「創発的協働研修」はそのような研修とは次の点で異なる。まず大きな特徴としては保育者と研究者が共に学びの担い手として課題を見出すことから始まる。他にも、地域や法人の異なる施設でありながら保育観や課題意識が近いこと、施設間が遠距離であること、研修が継続的であるといった特徴がある。保育者それぞれの保育観や課題意識が近いことで、友好的な関係が生まれやすいと考えられる。施設間が遠距離であることで、通常であれば出会うはずのない人や施設との繋がりが特別感を醸成し、日常を客観的に見つめ直す機会になるとも考えられる。

以上より「創発的協働研修」には新しい学びの可能性があると見えよう。しかし、開始されてから間もないことから、こうした特徴を十全に発揮しているとは言い難く、参加者が試行錯誤しながらより良い方向性を模索している。そのため、今後の「創発的協働研修」（「あいまーる」）の方向性を探るには現時点での課題を整理するとともに今後の展望を検討する必要がある。これにより、今後の「創発的協働研修」（「あいまーる」）の取り組みに対する示唆が得られるのではないだろうか。

2. 本稿の目的

本稿の目的は、法人の異なる保育施設間の保育者と研究者とで行なっている「創発的協働研修」（「あいまーる」）を紹介するとともに、2021年5月に日本保育学会第74回大会において行った自主シンポジウムの内容を報告し、「創発的協働研修」（「あいまーる」）の課題と今後の展望を述べることである。

II. 「創発的協働研修」（「あいまーる」）

1. 「あいまーる」

「あいまーる」は、筆者らと沖縄県うるま市のコスモストーリー保育園、広島県広島市の認定こども園くすの木との間で行われている、「創発的協働研修」の名称である。2019年から始まり、これまで2回の研修会とシンポジウムを行ってきた。「あいまーる」は沖縄の労働交換の習わしである「ゆいまーる」（沖縄文化社、2001）と、新たに創造するという意味の「Innovation」の頭文字であるIをかけた造語である。組織や立場を超えた協働的な学びによって新たなものを創り出そうという思いを込めて命名した。

2. 「あいまーる」の成り立ち

両園は地域も法人も異なり、「あいまーる」が開催されるまでは何の接点もない施設であった。そんな両園が結びついたきっかけは、以前から第一筆者と交流があったコスモストーリー保育園の園長である天願が2019年6月に書いた新聞のコラムを、第一筆者が読んだことにある。そのコラムには計画ありきで保育するのではなく、多様で複雑で創造的な予想外の出来事にこそ価値を求め、そうした出来事における子どもの様々な姿を保育記録に残すことが重要であるといった趣旨のことが書かれていた。このことは保育記録を研究

したいと考えていた第一筆者の思いと重なった。

というのも第一筆者は実際の保育において、計画どおりに保育を進めることよりも、計画を超えたところで起きてくる出来事の中でその場の状況を判断し、その後の保育の方向付けを行うことの方が、より重要なのではないかと考えていた。そして、その時々状況判断や方向付けの拠り所となっているのが、子どもとの関わりに基づく子ども理解や、子どもをみる視点にあると考えていた。そして、こうした子ども理解や子どもをみる視点は、保育記録を書いて読み合う中で培われる（河邊・田代，2016）。ここに、保育者自身が保育記録を書くことの意味があると考えていたのである。

こうした関心から、保育記録に関する研究を保育者とともに行い、保育実践に貢献したいと願っていた第一筆者にとって、天願のコラムは心に響いた。そしてちょうど同じ頃、第一筆者と交流のあった認定こども園くすの木が研究協力を申し出ていた。そこで両園に対して、組織や立場を超えて協働で学び合う創発的協働研修を提案した次第である。

両園はどちらも保育中の子どもの姿を次の保育実践に繋ぐことを重視し、実践と記録を往還することによって子ども理解や次の保育を構想していた。また、互いの園の理念や保育観が似ていることや設立年度も近いなど多くの共通点を有していた。

3. 参加園の概要

参加園の概要は表1の通りである。

表1 参加園の概要

| 園名 | 沿革 | 理念（園のHPからの引用） | 保育記録に関する取り組み |
|----------------------------|--|--|---|
| 沖繩県うるま市 コスモストーリー 保育園 | 2016年に、社会福祉法人勇翔福祉会の2園目の保育所として開園。2021年6月現在、本園の他に、同法人が運営する保育所1園と、0歳から2歳児を専門に預かる分園1園がある。 | ①子どもの可能性をことん信頼して成長物語を子ども、保育者、保護者と共に紡ぎ合う。 ②一人ひとりが主人公であり個性が響き合う豊かな保育を目指す。 ③保護者や地域の人々の信頼の場として真歌でできるよう、楽しく子育てを語り合うことを通して子育てに関する知識や知恵を共有していく。 | ラーニングストーリー、ドキュメンテーションなどの保育記録に取り組み、保育記録を用いた子ども理解に努めてきた。また、保育記録を活用して、保護者との連携や保育者同士のカンファレンスを行ってきた。本園の保育記録に関する取り組みは、書籍等（大豆生田・おおえだ，2020）でも紹介されている。 |
| 広島県広島市 認定こども園 くすの木 | 2011年に設立された株式会社くすねあが、認可外保育所として開所したくすの木保育園が前身。2016年には広島市の認可保育所に、2019年には認定こども園に移行した。2021年6月現在、本園の他に、同会社が運営する保育施設2園と、0歳から2歳児を専門に預かる分園1園、子育て支援施設1園の姉妹園がある。 | しぶとくたくましく ①子どもが主役 ②「遊び」と「対話」が中心 ③スタッフがよく学ぶ | クラスごとのドキュメンテーションの作成や週日案などの保育記録の作成を行ない、子ども理解や保護者との連携に努めてきた。また、週日案を園内に掲示して共有することによる保育者連携も行ってきた。園内りを地域にも発信するなど、保育記録を活用した地域連携にも、熱心に取り組んでいる。 |

Ⅲ. 「あいまーる」の活動経緯

1. 「あいまーる」の活動に関する概要

第1回・第2回「あいまーる」の活動に関する概要は表2の通りである。

表2 活動の概要

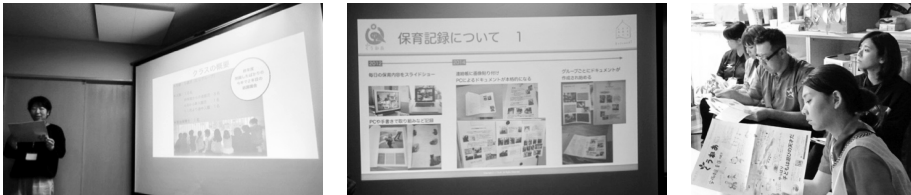
| | 日時 | 開催方法 | 活動内容 | テーマ | 参加者 |
|-----|------------------------------|-------------------------------|---|---|--|
| 第1回 | 2019年12月20日 15時30分～18時30分 | 沖繩県うるま市 コスモストーリー 保育園に参集 | 自己紹介（アイスブレイク）・ テーマ設定の理由の説明・園紹介・事例発表と討議・交流会 | 保育記録は何のため？誰のため？ ～新たな保育記録の創造に向けた拡張的学習の試み～ | コスモストーリー保育園：6名 認定こども園くすの木：7名 研究者：2名 |
| 第2回 | 2020年12月5日 13時00分～15時30分 | Zoom | 前回の振り返り・企画趣旨の説明・アイスブレイク（園の自慢の一品紹介）・自己紹介・事例発表と討議・グループディスカッション・全体総括・サブライズのうたと三線 | 繋がる？繋げる？保育記録と保育実践 | コスモストーリー保育園：6名 認定こども園くすの木：7名 研究者：3名 オープン参加：他園の保育者1名 |

2. 第1回「あいまーる」

(1) 事例発表の主な内容

認定こども園くすの木からは、姉妹園である祇園園舎の5歳児クラスの事例をもとに、「子どもの育ちを保育者とシェアするための保育記録」に関する発表があった。園の保育方針や子どもたちの様子を保護者と共有するためのツールとしてドキュメンテーションを活用したことで、保護者の保育への関心が醸成されるとともに保護者同士の交流が増え、共感的関係に発展したことが報告された。

コスモストーリー保育園からは園全体で取り組んできたラーニングストーリーに対して、文字で伝えることの難しさに直面しながらも、書くことによって子どもの遊びや心情への理解が深まり、それが徐々に書きやすさにつながっていったことが発表された。また、ラーニングストーリーを持ち寄って読み合う機会があることが、書くことのモチベーションになっているというということが報告された。



第1回目「あいまーる」の様子

(2) 討議の内容

発表後の討議では参加した保育者から「保育記録を書く力は保育者自身の言語力だけでなく、子ども理解や保育実践力と繋がっているのではないか。だとすれば、子ども理解や保育実践力が向上すれば記録も向上するのではないだろうか」という論点の提示があった。また「保育者の省察や子どもの学び、保護者連携といった様々な視点がある中でどの視点で書けばいいのかわからなくなる」といった疑問、「ある程度保育記録を書けるようになると、手法を磨くことに注力しすぎてしまう」といった悩み、「様々な繋がりや対話に保育記録を活用することで今の保育記録の限界性を超えられるとしたら、活用も含めて保育記録なのではないか」といった意見も出された。

(3) 参加者の感想

参加した保育者の中で最も経験年数が短い新卒2年目の保育者A（認定こども園くすの木）の感想には、初めて記録を書いた頃は戸惑いや不安があったという保育者B（コスモストーリー保育園）の発表を聞き、今の自分の姿が重なったとの記述があった。保育者Bが保育経験を重ねて何度も記録を書く中で子どもの姿が捉えられるようになり、一人ひとりの育ちを記録に残していきたいと思うようになったということに、背中を押された感じがしたとも書かれていた。

3. 第2回「あいまーる」

(1) 事例発表の主な内容

コスモストーリー保育園からは保育マップ型記録の改良と、卒園前のラーニングストーリーに関する発表があった。保育マップ型記録のフォーマットに予め変わらない環境を入れ込んでおいたり、遊んでいる写真を挿入したりすることで、振り返りやすくなることや記録時間の短縮になること、その分次の保育の構想の部分に時間を費やすことができることなどの利点が語られた。また卒園前に、入園頃からのラーニングストーリーを見返すことで子どもの育ちが繋がっていることを意識することができ、小学校への接続にも活用できるという報告があった。

認定こども園くすの木からは、第1回「あいまーる」の振り返りで引用した保育者Aによる、入職から3年間書き続けているドキュメンテーションの変容についての発表があった。保育者Aによると、1年目は思うような表現が浮かばずに時間がかかってしまっていたが、ドキュメンテーションを書き続ける中で徐々に子ども一人ひとりの個性を捉えられるようになっていった。その第1回の「あいまーる」に参加したことで子どもの今を知ってもらいたいという思いが強くなったことなどが報告された。3年間で、クラス全体や子ども一人ひとりの読み取りを深められるように意識するようになったという自身の成長は、園内での保育記録の研究会で記録を読み合ったことや「あいまーる」への参加によるところが大きかったという気づきも語られた。発表を聞いた参加者からは、保育者Aをまなざす他の保育者のあたたかさが感じられたという感想もあった。

(2) 討議の内容

保護者との共有という視点から「保育記録は、母子手帳の続きや保護者の方との交換日記のような役割も持っているのではないか」、「その子の気になる部分はプラス思考で書くことで、保護者とも共有できる」といった意見が出された。子どもの気になる部分に関する記述は、保護者と共有しない別の記録にも残しているなどの記録の種類による書き分けの話題もあがった。また保育者との共有という視点からは、「開示し合うことで保育者同士が学び会えるのが保育記録。その結果、子どもに返ってくる」という意見が出された。

(3) 参加者の感想

第1回に引き続き参加した保育者C（コスモストーリー保育園）の感想には、保護者や子ども達に向けてはもちろんのこと、同僚同士で子どもの成長を共有する為にも保育記録が大切だと改めて感じた、保育記録を子ども達に関わる全ての人に発信したいと感じたという記述があった。また、時を経て子ども達自身が読み返した時に、自分が小さい時に遊んでいたことや学んだことを知り、こんなにも関わってくれる人がいたということを感じてほしいと思った、とも書かれていた。

IV. 日本保育学会第74回大会における自主シンポジウムの報告

1. 自主シンポジウムの概要

自主シンポジウムの概要は、表3の通りである。

表3 自主シンポジウムの概要

| 自主シンポジウム | 日時 | 開催方法 | テーマ | 話題提供及び指定討論 |
|---|------------------------|------|--|--|
| 日本保育学会第74回大会 自主シンポジウム 企画者 本岡美保子 司会 濱名潔 | 2021年5月16日 10時から11時 | Zoom | 保育者のエージェンシーを生かす研修とは ー活動理論を手掛かりとした保育研修の構想に向けてー | 話題提供1：コスモストーリー保育園・天願順徳 「保育記録の『発先』は誰なのか」 話題提供2：認定子ども園くすの木・坂井くみ子 「保育の質向上と園内外の協働と同僚性構築への 模索ー保育記録自主研修からー」 話題提供3：関西大学文学部・山田直之 「創発する保育者ー拡張的学習としての研修を 実現する活動理論的介入研究ー」 指定討論：琉球大学教育学部・岡花新一郎 |

(1) 登壇者の報告・指定討論の概要

1人目の話題提供者である天願は、これまで自園で保育記録に関する園内研修を行い試行錯誤しながら保育記録に取り組んできたこと、「あいまー」の中で新たな課題に直面したことを報告した。それはそれぞれの保育者の綴る記録を大切にしつつ、多様性をどこまで受け入れていくのかという課題であった。

2人目の話題提供者である坂井は、「あいまー」に向けての取り組みと「あいまー」での学びを自園の保育者とどう共有していくかという課題に直面したことを報告した。各自の働き方や考え方の違いを受容しながら、保育記録に対する取り組みや複数園の交流による創発的協働研修という方法を園の文化として根付かせていきたいと述べた。

3人目の報告者であり第二筆者の山田は、活動理論に基づいた拡張的学習²の見地から、「あいまー」の展開可能性について論じた。「あいまー」において改革の対象とされた保育記録は、実践を映し出す「第一の刺激」であるミラー (Engeström, 2020) である。山田は、これを共有することは実践の振り返りになるだけでなく、組織そのものや各保育実践に内在する矛盾や葛藤を意識化するツールになると述べた。そして今後「あいまー」が共通に認識された課題を乗り越え、矛盾や葛藤を止揚するような新たな成果物を創発する可能性に言及した。活動を変革し新しい活動システムを協働で生み出すために、拡張的学習の中で行われているチェンジラボラトリー³を行っていききたいという展望も示した。チェンジラボラトリーを駆動させることで保育者らがエージェンシー⁴を発揮し、概念形成としての拡張的学習を実現するサイクルを創発しようと試みているのである。

² 実践者たちが、自分たちの活動システムの中で発達し、変革していくことに格闘する中で現れ、集団的な発達の最近接領域を横切っていくような学習 (Engeström, 2020)。

³ チェンジ・ラボラトリーとは、拡張的学習に対する意図的な支援としての介入のツールキットである。その方法論について、詳しくはEngeström (2018) を参照。

⁴ 活動理論の観点からすれば、自分たちの世界と自分自身の行動を変え、自分たち自身の活動システムを形成しようとする人々の能力と意志を意味する (Engeström, 2018)。

指定討論者の岡花は、登壇者の発表に対して5つの論点を提示した。①研修に参加する保育者の問題意識のばらつきをどう捉えるのか、つまり、自分たちで問いを立ち上げるプロセスこそを大事にする必要があるのではないか。②主体性・エージェンシーの理解が発表者によって違うのではないか、そもそも主体性・エージェンシーとは何なのか。③保育記録を書くことそのものが活動なのではないか、では「あいまーる」における保育記録の位置づけは何なのか。④「あいまーる」において、法人を超えた「創発的協働同僚性」は現れているのか。⑤チェンジラボラトリーは可能なのか、である。

加えて最後のまとめでは、新しい保育記録を生み出すことそれ自体が研修の目的になりかねないとの危惧が述べられた。新たな保育記録を生み出すことは、現実の問題を解決するための手段の1つになる可能性があるが、そのことが目的になってしまうと、研修での学びが保育記録を生み出すための学びに収斂してしまいかねないという危惧である。手段の目的化を避ける必要があるのではないか、という指摘でもあった。

(2) フロアーからの質問

参加者からは「保育記録が良くなるのが何につながるのか」、「何の為、誰の為の研修なのか」、「園の中で研修に参加していない人に拡張していくための具体的なツールはあるのか」、「写真や動画など様々な記録媒体がある中で、保育記録を書くことに着目するのはなぜか」、「記録を用いた事例研修のように感じるが、これがいまだここにはないものを学んでいると言えるのか」といった質問が出された。

またシンポジウムの後に「園外での学びを園に持ち込もうとしたときに創発性が失われてしまうのではないか。『あいまーる』の参加者によって一度消化され、さらに園文化として醸成していく時間が必要なのではないか」という感想も出された。

2. 自主シンポジウムを振り返って

保育学会では、活動理論的アプローチの新規性に注目が集まったためか、上記のように多くの質問が出され、活発な議論が展開された。参加者にとっては拡張的学習における創発の仕組みには様々な道具があること、それを実践している人々がいること、拡張的学習として研修を行うことで研修がより良いものになる可能性があることを知る機会になったと考えられる。

研修や拡張的学習に関して参加者との共有ができた一方で、なぜ保育記録なのか、つまり保育記録や保育記録を書くことが内包する矛盾や葛藤に対する議論の深まりはなかった。それは今回の自主シンポジウムと言うより、これまでの「あいまーる」が保育記録に対する課題の共有にとどまり、個々人が抱える矛盾や葛藤を参加者全体のものにできていない為であると考えられる。故に「あいまーる」においてはいまだ、意志と能力を踏まえた集団的主体概念であるエージェンシーは立ち上がってきてはいないと言えるだろう。

以上を踏まえると、今回の自主シンポジウムのテーマでもある保育者のエージェンシーを生かす研修とはすなわち、その研修のテーマに対して個々人が抱える矛盾や葛藤が参加者全体のものとなって自分たちで研修を形成しようとするエージェンシーが立ち上がり、

そのエージェンシーが矛盾や葛藤をブレイクスルーするような新たなものを生み出す力と
なって動き出すような研修であると考えられる。

V. 「創発的協働研修」(「あいまーる」)の課題と展望

1. 「あいまーる」及び、介入研究としての課題

自主シンポジウムを行なったことによって、「あいまーる」及び介入研究としての課題
を見いだすことができた。課題は以下の3点である。

1 点目は、現段階では個人の課題を共有するにとどまり、保育記録に関して個人が抱え
る矛盾や葛藤が掘り起こされていないことである。よって、「あいまーる」参加者全体と
して探求すべき問題も明らかになってはいない。まずは個人が無意識のうちに抱えている
矛盾や葛藤を掘り起こし、そこから出発する必要があるだろう。

2 点目は、「あいまーる」は保育者が自発的に参加する研修であることから、園内での
課題や学びの共有が難しいことである。

3 点目は、この研究がいまだ、活動理論的介入研究として十分整理されていないとい
うことである。本研究におけるエージェンシー概念には曖昧さが残り、第二の刺激となる活
動システムの一般モデル(Engeström, 2018)を用いたチェンジラボラトリーにも至って
いない。このような活動理論的介入研究としての不備を整理した上で、今後、補っていく
必要があるだろう。

2. 今後の展望

「創発的協働研修」は施設間が遠距離であることで、通常であれば出会うはずのない人
や施設との繋がりが特別感を醸成し、日常を客観的に見つめ直す機会になっていた。今後
は各自が抱える保育記録に関する矛盾や葛藤にまで踏み込んだ討議を行い、参加者集団共
通の問題を見出したいと考えている。またこれまでの取り組みを活動理論及び拡張的学習
の視点から分析することで、活動理論的介入研究の道筋を描きたいと考える。

加えて開催時期や実施方法に関しては、慎重に検討していかなければならないことも
記しておきたい。2020年初頭から起こったCovid-19のパンデミックによる移動制限によっ
て、2回目の「あいまーる」はオンラインでの実施を余儀なくされた。施設間が遠距離で
あることはこの「創発的協働研修」(「あいまーる」)の特徴の1つであったが、もう1つ
の特徴である継続的な研修の実施を難しくさせる可能性があることを浮き彫りにした。
Covid-19の感染状況に留意しながら、今後も継続的に研修を実施したいと考える。

謝辞

「あいまーる」の活動と研究についてご助言くださいました琉球大学教育学部の岡花祈一郎先生に、心
より感謝申し上げます。また快く研究にご協力くださっている、コスモストーリー保育園の先生方、認定
こども園くすの木先生方に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- Engeström, Y (2018) 拡張的学習の挑戦と可能性—いまだここにはないものを学ぶ— (山住勝広 監訳). 新曜社 (Engeström, Y (2016) *Studies in Expansive Learning : Learning What Is Not Yet There*. New York: Cambridge.University.Press)
- Engeström, Y (2020) 拡張による学習 完訳増補版 発達研究への活動理論からのアプローチ (山住勝広 監訳). 新曜社 (Engeström, Y (1987) *Learning by Expanding : An activity-theoretical approach*. New York: Cambridge.University.Press)
- 五十嵐久美子・齋藤勇紀・宮路絵里・岩崎保之 (2021) 保育施設間の学び合いによる実践・対話研修会の効果. 京都女子大学生生活福祉学科紀要, 16, 53-58
- 伊藤博美・長江美津子・沼野真弓・堀尾初美 (2016) A市における自主研修による保育者の専門性向上. 教育保育研究紀要, 2, 39-48
- 片山喜章 (2013) 保育者を支援するネットワーク—「公開保育 (みてみて保育)」の新たな取り組み形態と多様性の理解. 発達, 134, 53-58
- 河邊貴子・田代幸代 (2016) 保育ナビブック 目指せ, 保育記録の達人! Learning Story + Teaching Story. フレーベル館
- 厚生労働省 (2017) 保育所等キャリアアップガイドライン
- 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針
- 厚生労働省 (2020) 保育所における自己評価ガイドライン
- Midgley, G (2000) *Systemic intervention: Philosophy, methodology, and practice*. New York: Kluwer
- 中坪史典・境愛一郎・濱名潔・保木井啓史・伊勢慎・サトウタツヤ・安田裕子 (2018) 質的アプローチが開く「協働型」園内研修をデザインする 保育者が育ちあうツールとしてのKJ法とTEM. ミネルヴァ書房
- 沖縄文化社 (2001) ひとつことウチナーグチ. 沖縄文化社
- 大豆生田啓友 (2020) 保育の質向上と外部研修のあり方 キャリアアップ研修における往還型研修の意義を通して. 小児保健研究, 79 (2), 99-103
- 大豆生田啓友・おおえだけいこ (2020) 日本版保育ドキュメンテーションのすすめ 「こどもはかわいいだけじゃない!」をシェアする写真付き記録. 小学館
- 齋藤勇紀・金洋輔・岩崎保之 (2020) 地方自治体における新設認定こども園の教育・保育カリキュラムの編成過程—「循環型」研修会によるカリキュラム・マネジメント—. 京都女子大学生生活福祉学科紀要, 15, 23-30
- 境愛一郎 (2020) 「参加・協働型園内研修」の導入に対する若手保育者の意識. 共立女子大学家政学部紀要, 66, 99-112
- 鈴木康弘・吉田直哉 (2019) 協働型園内研修論が前提とする保育者の専門性観—子ども理解と人間関係を主題化することの問題点. 敬心・研究ジャーナル, 3 (2), 59-67

A Report on the Issues and Prospects of “Collaborative Intervention in Nursery
Teacher Development Program”
: Ongoing Efforts Based on Sharing Problems Related to Childcare Records

MOTOOKA Mihoko, YAMADA Naoyuki, HAMANA Kiyoshi

Abstract

This paper aims to elucidate the ongoing efforts of the “Collaborative Intervention in Nursery Teacher Development Program” (“*I-maru*”) by describing an independent *I-maru* symposium and highlighting the issues and prospects of *I-maru*. The Collaborative Intervention in Nursery Teacher Development Program aims to use formative intervention research to create new activities for researchers and nursery teacher professionals to collaborate across organizations and positions. We conducted two *I-maru* sessions, where we introduced each nursery school’s approach to childcare records and discussed the problems individual nursery teachers face. In the symposium, we discussed the new conflicts created by *I-maru* in each nursery school and envisaged ways to realize expansive learning in future *I-maru* sessions. At present, it is thought that the issues are only shared, and agency as a collective subject has not yet been developed. In the future, we would like to uncover any contradictions and conflicts related to childcare records, explore them as issues common to all participants, and conduct extended learning.

Keywords: collaborative intervention in nursery teacher development program, nursery teachers, collaboration, childcare records, formative intervention research